お魚探検隊について――食育フォーラムにおける報告

2011 年 12 月 23 日、市教育委員会主催の「境港市食育フォーラム」が開催され、境一中地区の幼保小中の食育状況の報告や研究発表がありました。その際、園長が報告したことは以下の通りです。

遊びの学校
びさい幼稚園
bisai-kindergarten.com

「お魚探検隊」について

おはようございます。遊びの学校びさい幼稚園です。

今日は年長組を中心にした活動「お魚探検隊」についてお話いたします。

その前に一言、幼児教育とはどういうものか性格付けておきたいと思います。なぜかというと幼児教育の理解は大変難しいからです。

教育の根本性格の違い

教科教育―小中学校、高校

総合教育―幼稚園
（未分化教育）

小学校以降の教育と対比させて言うと、小中学校などは≪教科教育≫と言えます。国語、算数、理科、社会、家庭科、英語というふうに、あらかじめ分けられた教科が前提となり、それぞれに教科書があって進められます。

それに対して、幼児教育は≪総合教育≫です。教科に分かれていないので未分化教育と言ってもいいかもしれません。教科書はありません。そこがむつかしいところでもあり、おもしろいところでもあります。

①市場体験

それで「お魚探検隊」ですが、まず市場体験をします。

市場管理会社にガイドをしてもらって、水揚げを見、市場に並ぶ魚を見せてもらって、それから水産物直売センターに行きます。子どもたちは目を輝かせて魚に見入ります。「あ、ほんとにノドが黒い！」と歓声を上げます。保護者も別の日にＰＴＡ活動として同じルートをたどります。

市場見学は小学校で言えば「社会科」にあたり、３，４年生でするようですが、(『学習指導要領』(以下『要領』と略す）社会第３学年及び第４学年。内容（２）「地域の人々の生産や販売について、次のことを見学したり調査したりして調べ、それらの仕事に携わっている人々の工夫を考えるようにする。」) 境港の小学校では行われていないそうです。

体験とは世界との出会いです。未知のもの、予測不可能なものとの関わりですから、驚きがあります。そこからさまざまな問いが出てきます。「なんでたくさんの魚がいるの」。みなさんこの問いに答えられますか。この問いは世界に多様な生物がいることの根拠に向けて発せられています。そうして市場の人に質問しています。問いは関心の深まりのあらわれです。新たな展開への一歩です。体験の入力が深ければ深いほど、表現の出力は広く、入力が鮮烈なほど出力は多様になります。

②言語化

次に、言葉でおさえます。

体験したことを言葉にもたらすことによって意味づけをします。体験したことを思い起こしながら、魚を「とる人」「売る人」「買う人」「作る人」がいて私たちの口に入るという形で定式化します。そして社会というものの基礎構造をおさえつつ、そういった人間社会の営みの根底には「与え続ける海」があることも伝えます。

これも「社会科」の範疇でしょうけど、国語かもしれません。(『要領』国語第１学年及び第２学年。内容Ａ話すこと・聞くこと「（1）ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め，必要な事柄を思い出すこと。エ 大事なことを落とさないようにしながら，興味をもって聞くこと。オ 互いの話を集中して聞き，話題に沿って話し合うこと。（2）ア 事物の説明や経験の報告をしたり，それらを聞いて感想を述べたりすること。」)

体験と言葉の関係は逆ではいけません。言葉を教え、知識を植えこんでから体験すると、予め体験が方向づけられ限られてしまうからです。

この体験から様々な活動が展開してきます。

③表現；美術的造形

これは体験後に描かれた絵です。見たもの全てを描こうとするような絵もあり、

特に関心があったものを描いたものもあります。これらは設定保育の時間に描かれたものですが、自由遊びの時間に展開してくるものもあります。

右の写真は壁の海です。階段の青い壁に子どもたちが自由に作った魚が次々と貼りつけられ海のようになりました。

壁の海

粘土の水族館

粘土で魚を作って、粘土板に貼り付けたものが次々につながって、それを廊下に飾ると粘土の水族館ができました。

自発性×協調性＝協同的学び

これは境港の海の表現です。少数の人から始まり、興味のある人が加わって大きな作品になっていきます。いづれも一人からはじまって関心や楽しみが共有され、つながっていきます。全員が参加しているわけではありません。「描きなさい」とも言われていません。これは、個々の自発性を失わずに、その尖端で他者と折り合いをつけながら協働していくという、「協同的な学び」と言われるもので、幼稚園の年長組でこそ育つ、幼稚園の醍醐味です。

これらは教科で言えば「美術」「図工」でしょう。（『要領』図画工作第１学年及び第２学年。目標（1）進んで表したり見たりする態度を育てるとともに，つくりだす喜びを味わうようにする。（2）造形活動を楽しみ，豊かな発想をするなどして，体全体の感覚や技能などを働かせるようにする。）

墨絵に挑戦

④表現；身体的表現

びさいフェスティバル（発表会）でも漁師の役があり、フナの役があり、伝説のクロマグロの怒りが導くストーリーがあったりします。卒園児の中には今でも家で、食べ残しをめぐって「伝説のクロマグロ」を引き合いに出す子どもがいます。

漁師役の網さばき

これらは、言葉、リズム、身体表現なので、音楽、体育、国語に関係するでしょう（『要領』音楽第１学年及び第２学年。目標「(2) 基礎的な表現の能力を育て，音楽表現の楽しさに気付くようにする。」体育第

伝説のクロマグロ登場シーン撮影風景

1学年及び第2学年。内容F表現リズム遊び「（1）次の運動を楽しく行い，題材になりきったりリズムに乗ったりして踊ることができるようにする。ア表現遊びでは，身近な題材の特徴をとらえ全身で踊ること。イリズム遊びでは，軽快なリズムに乗って踊ること。（2）運動に進んで取り組み，だれとでも仲よく踊ったり，場の安全に気を付けたりすることができるようにする。（3）簡単な踊り方を工夫できるようにする。」）

⑤クッキング

昨年度はクッキングをしました。

年長児はイワシを２尾手開きしてつみれを作りました。聞くところによると、公立の保育所では園児のクッキングができず、小学校では生魚が扱えないというのですが、ほんとでしょうか。

生きもの一匹丸ごとなので大変生々しいものです。残酷さも伴っています。食べるということに不可避な、生きること死ぬこと殺すことのセンスが生々しく呼び起されます。

これは「家庭科」「理科」もしかしたら「道徳」でしょう。(『要領』家庭第5学年及び第6学年、目標(1)「 衣食住や家族の生活などに関する実践的・体験的な活動を通して，自分の成長を自覚するとともに，家庭生活への関心を高め，その大切さに気付くようにする。」　理科第3学年、目標(2)「(前略) 生物を愛護する態度を育てるとともに，生物の成長のきまりや体のつくり(中略)についての見方や考え方を養う。」　道徳第3学年及び第4学年、内容 3「(1) 生命の尊さを感じ取り，生命あるものを大切にする。(2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し，自然や動植物を大切にする。」）

体験とその表現（言葉や身体表現等）を含んで経験です。「お魚探検隊」は「体験学習」ではなく「経験」です。

結び

以上、「お魚探検隊」は「社会」「国語」「家庭科」「理科」「図工」の総合であることがお分かり頂けたと思います。でも、本当は「お魚探検隊」は社会や図工の「総合」なのではなく、お魚探検隊です。また、それは単なる「食育」ではありません。狙っているところは以下の通りです。

●本物を見る

●消費地でなく生産地に近いところでの体験をする

●境港という地域にあるものに触れる

・地域に根付いた保育の試み

・境港が「ふるさと」になる

→いつか境港に帰ってくる力「ふるさと愛」の醸成；過疎化対策

●「来し方行く末」へのセンスを養う

＝どこから来てどこへ行くのか　魚が、人類が、私が

質疑応答

上の発表内容に関して、魚市場見学と生魚のクッキングについて、いくつか話がありました。

中学校でアジを三枚におろしたという活動があるのを聞いたので、それでは小学校で生魚を使う場面があるかどうかを改めて質問しました。

それに対して小学校の先生がたから以下のような回答がありました。

「肉、魚などの生のものは使わない」「学習の単元はない」「以前はあったけどこの六年間はおこなわれていない」

また、ある先生の発表のなかで「小学校の家庭科では生魚は扱えない」とあったので、再度質問いたしました。「“扱わない”のか、“扱えない”のか、どちらなのか。学校ごとの判断なのか、市としての規定なのか、それとも何かあるのか。」と。

最終的に上道小学校の校長先生が「『学習指導要領』に生の肉や魚は扱わないと明記されている」と答えてくださったので、全国的に「扱えない」ということがわかりました。（『要領』家庭科。指導計画と内容の取扱い３「(3)調理に用いる食品については，生の魚や肉は扱わないなど，安全・衛生に留意すること。」）

また、閉会後小学校の先生より、総合学習で市場見学に行く人もいるし、ＰＴＡ活動や学年行事で市場に行ったり魚をさばいたりすることがあるという実情を聞かせていただきました。親子の体験の機会としては結構なことであると思いました。ただ、総合学習はさておき、ＰＴＡ活動というのは任意の活動であって、教育体制として・カリキュラムとして、どう確保されているかという土俵で議論されねばならない事柄なので、その脈絡では、ＰＴＡ活動をもちだすことは（それがどれほど素晴らしい活動をしていたとしても）的を外していると言わざるを得ません。